AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

名寄市立大学紀要 (2007.03) 1巻:15～21.

成人看護学におけるディベート演習についての検討

舟根妃都美、成田　円

〈論　文〉

成人看護学におけるディベート演習についての検討

舟根妃都美，成田　　円[1)]

A study on the effects of using debate in an Adult Nursing Care class

Hitomi FUNANE, Madoka NARITA[1)]

[1)]札幌北楡病院

This study was conducted at Nayoro City College to clarify the learning outcomes of using debate in an Adult Nursing Care class. The theme of the debate was whether or not organ transplants should be carried out. Results from an opinion survey given to 2nd year nursing students in 2005 were analyzed. Results showed that a majority of students gained an increased awareness of the variety of others' opinions, the changeable nature of their own opinions, and the discovery of new opinions through debate. They also gained an increased understanding of the skills necessary for debate. Debate enabled them to reflect more effectively upon their own values and dispositions. Students voiced a favorable opinion of debate. This study clarifies a need for more careful introduction of debating processes and principles, clearer pre-debate instructions, and a more considered summary of debating results.

本研究の目的は，成人看護学で行っているディベート演習が，学生のどのような学びにつながっているかを明らかにすることである。2005年度2年次学生の演習レポートについて分析を行った。学生は，ディベート演習において「多様な考え方の理解」，「自分の意見の変化」，「新しい意見の発見」について学び，ディベートに必要な能力について気づくことができた。また，ディベート演習を通して，自己を振り返り，自身の傾向に気づき，今後の課題へとつなげていた。学生はディベート演習に対して肯定的な感想を持っていた。ディベート演習の今後の課題は，導入を丁寧に行うこと，円滑にディベートができるよう明確な設定を提示すること，丁寧なまとめをすることである。

キーワード：ディベート，ディベート演習，成人看護学

はじめに

ディベートは，ものごとの持つ二面性を複眼的に見る目を養い，あらゆることに疑問を投げかける冷静さをもたせ，客観的な根拠に基づく合理的な判断力を育てるといわれている[1)]。これを意識的に教育の中で行い，誰もがそのような技術を得られるようにしようというのが教育ディベートの意義である。

看護教育におけるディベートは，脳死や臓器移植の是非についてなどの倫理的課題の理解[2)-5)]や，論理的思考力育成[6)-10)]を目的として導入されてきている。

市立名寄短期大学看護学科の成人看護学の授業では，2003年度よりディベート演習を取り入れて行っている。本研究の目的は，成人看護学で行っているディベート演習が，学生のどのような学びにつながっているかを明らかにし，今後の授業へ活かすことである。

1．教育の概要

本研究の検討対象であるディベート演習は，2年後期開講の成人看護学Ⅳで行っている。成人看護学Ⅳのねらいは，「成人期の対象がクリティカルな状況におかれた場合や終末期にある状態の看護問題を理解し，患者および家族への看護援助について学び，看護職の役割について考察する」である。クリティカルな状況として「臓器移植」をテーマとしたディベート演習を設定し，ディベートおよび準備学習についてのオリエンテーションとして2時間の講義と，4時間のディベート演習を行った。「ディベート演習」の教育目標は，①臓器移植についての理解を深める，②ディベートにより，「理解力」，「分析力」，「構成力」，「伝達力」を養う，の2項目である。

教育内容は以下のとおりである。

＜講義内容＞

ディベートの定義，ディベートで必要となる技術や能力について講義を行った。また，「臓器移植について」という演習テーマの説明をした。ディベートの準備学習としての課題は，①臓器提供と臓器移植について，文献を用いて自己学習をする，②「臓器移植を受けたいが，臓器提供はしたくない」，「臓器移植を受けたいし，臓器提供もする」，「臓器移植を受けたくないし，臓器提供したくない」，「臓器移植を受けたくないが，臓器提供はする」という４つの考え方について自己の意見をまとめる，③ディベート演習に向けて，自分のグループの意見が述べられるよう準備学習をする，とした。準備学習としての課題はレポートとし，準備学習期間は約２か月間，締め切りはディベート演習日の前日とした。課題を提示するにあたって，参考文献および参考資料を紹介した。

＜ディベート演習内容＞

演習は，クラスをＡグループ（25 名）とＢグループ（27 名）の２グループに分けて行った。各グループを３つに分け，対立する２チームと判定チームとした。Ａグループの対立するチームは，「臓器移植を受けたいが，臓器提供はしたくない」，「臓器移植を受けたいし，臓器提供もする」とした。Ｂグループの対立するチームは，「臓器移植を受けたくないし，臓器提供したくない」「臓器移植を受けたくないが，臓器提供はする」とした。ディベート演習の学習環境設定は，図１のようにした。

演習の時間配分は，オリエンテーション 10 分，Ａグループのディベート（Ｂグループは傍聴）60 分，Ａグループの判定 10 分，休憩 10 分，Ｂグループのディベート（Ａグループは傍聴）60 分，Ｂグループの判定 10 分，まとめ 20 分，として行った（図 2)。オリエンテーションでは，ルールとして①司会と書記はおかずフリートークで話すこと，②自分のグループが優勢となるように根拠を持って意見を言うこと，②相手の意見を批判する場合，根拠を持って批判すること，③必ず全員が発言すること，④判定時は，判定チームの全員が一人ずつ，どちらが優勢だったかについて客観的に述べること，を確認した。なお，ディベート演習に立ち会う２名の教員はタイムキーパーの役割のみとし，途中で一切発言しないことを学生に告知した。

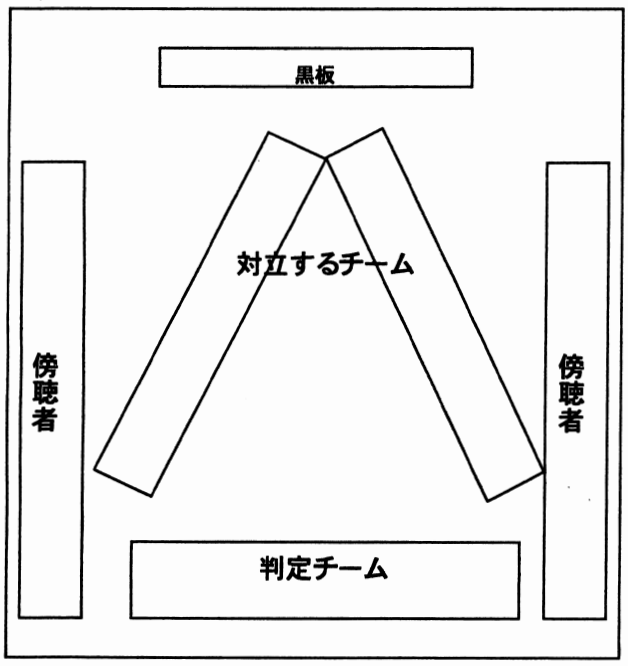

図１　ディベート演習の学習環境設定

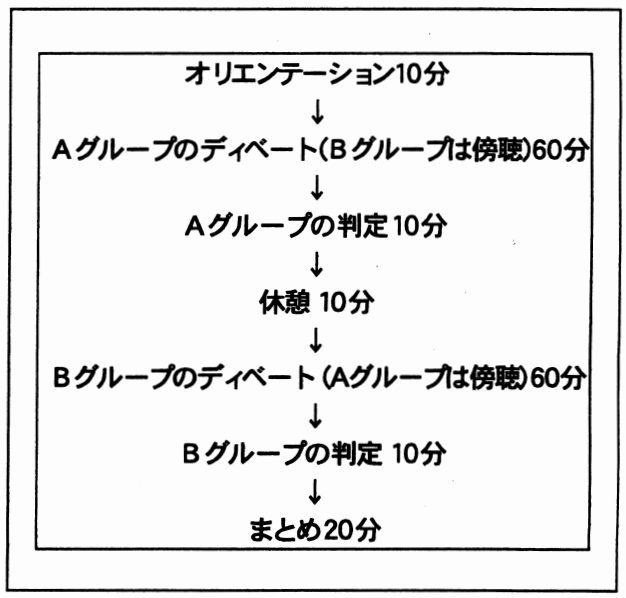

図２　ディベートの流れ

II．研究方法図１　ディベート演習の学習環境設定

1. 対象

対象は，2005 年度２年次学生 52 名である。

2. 期間

データ収集期間は，2006 年１月 19 日～１月 23 日である。

3. データ収集方法

ディベート演習終了後に，『ディベート演習についての意見・感想』というテーマで，A4判の用紙1枚にレポートを書いて提出してもらった。レポートは，自由記述形式とした。

4. 分析方法

レポートの自由記述データの分析は，ベレルソンの内容分析[11]の手法を用いて行った。単文を1記録単位とし，記録単位の意味内容の類似性に基づきカテゴリー化を行い，各カテゴリーにおける記録単位の出現頻度は数量的に集計した。

5. 倫理的配慮

対象者には，レポートは今後の教育に役立てること，研究の目的以外には使用しないこと，成績評価には一切影響がないことを説明し，成績評価提出終了後に再度説明し，了承を得た。

III. 結果

対象者52名中，ディベート演習欠席者4名を除いた48名のデータが分析対象となった。

レポートの記述内容は，681記録単位に分割できた。681記録単位を意味内容の類似性に基づき分類した結果，11カテゴリーに分類することができた。これら11カテゴリーについて，記録単位数の多い順に述べる（表1）。

表1 ディベート演習についての意見・感想

カテゴリー	記録単位数	%
1. 演習における学び・気づきの内容	117	17.2
2. ディベートの実際・内容について	115	16.9
3. 感覚的な感想	110	16.1
4. 自己評価	109	16.0
5. ディベート演習に対する意見・感想	95	14.0
6. 臓器移植について	41	6.0
7. これまでのディベート体験について	41	6.0
8. 看護との関連について	22	3.2
9. 他者評価	12	1.8
10. 学生カンファレンスとの関連について	11	1.6
11. 生命に対する考えについて	8	1.2
合　計	681	100

【1. 演習における学び・気づきの内容】を形成した記述は，117記録単位（17.2%）であり，さらに10サブカテゴリーに分類された。サブカテゴリーは「多様な考え方の理解」37記録単位，「自分の意見の変化」21記録単位，「新しい意見の発見」12記録単位，「伝達力」12記録単位，「構成力」12記録単位，「知識の必要性」10記録単位，「理解力」4記録単位，「集中力」2記録単位，「分析力」1記録単位，「その他」6記録単位であった。具体的内容は，“多様な意見があることに気づくことができた。”，“ディベート演習をして，自分の意見が変わった。”，“皆で意見を出し，話し合うことで新しい発見や考え方がでてくる。”，“相手が理解できるように伝えなくてはならない。”，“発言内容をしっかり構成する必要がある。”，“正しい知識が必要である。”，“人の意見を理解する力が必要である。”，“全部の意見を聴くには集中力が必要であった。”，“発言を鵜呑みにせず，多角的に分析する重要さを学んだ。”などであった（表2）。

表2 「ディベート演習における学び・気づき」の具体的内容

サブカテゴリー		記録単位数	具体的内容
多様な考え方の理解		37	多様な意見があることに気づくことができた。 様々な意見や考え方が個人個人にあるのだと改めて実感することができた。 価値観は一人ひとり違うんだと痛感した。 「そういう考え方もあるんだ」など納得することがたくさんあった。
自分の意見の変化		21	ディベート演習をして，自分の意見が変わった。 それぞれの考えをきくことで，意識の変化があった。 もう一度自分の考えを見直そうと思った。 自分の考えはディベート後の今も変わってはいない。
新しい意見の発見		12	皆で意見を出し，話し合うことで新しい発見や考え方がでてくる。 自分が考えていなかったことも発見できると思う。 自分が知らなかったこと，考えなかったことが見つかる。
ディベートに必要とされること	伝達力	12	相手が理解できるように伝えなくてはならない。 自分たちの意見が優勢だと感じさせたり理解してもらうことの大変さを学んだ。 考えの話し方，伝え方を学ぶことができた。
	構成力	12	発言内容をしっかり構成する必要がある。 人にわかってもらうには，数字など具体的な統計を表示することが大切である。 自分の意見を言うときは，いかにまとめて発言できるかが大切である。
	知識	10	正しい知識が必要である。 しっかりと勉強しないと矛盾していることを言ってしまうことを学んだ。 根拠を持って話すためには正しい知識を持つことが必要である。
	理解力	4	人の意見を理解する力が必要である。 相手のことを理解することが大切だと思った。
	集中力	2	全部の意見を聴くには集中力が必要であった。
	分析力	1	発言を鵜呑みにせず，多角的に分析する重要さを学んだ。
その他		6	ディベートは学ぶことが多い。

【2. ディベートの実際・内容について】を形成した記述は，115 記録単位（16.9%）であった。具体的内容は，“話題がある一点に集中してしまったことがあった。”，“判定時は，平等に見なければならなかったので注意しながら聞いた。”，“傍聴している時は，いろんな考え方があるんだと考える時間もあってよかった。”などであった。

【3. 感覚的な感想】を形成した記述は，110 記録単位（16.1%）であり，さらに 6 サブカテゴリーに分類された。サブカテゴリーは「難しかった」52 記録単位，「大変だった」17 記録単位，「緊張・不安」17 記録単位，「わからない」13 記録単位，「おもしろい・楽しかった」7 記録単位，「疲れた」4 記録単位であった。具体的内容は，“どちらが優勢であるかを判定するのは難しい。”，“相手にどう説明したら納得してもらえるか，伝わるのかを考えながら文章を構成するのがとても大変だった。”，“あがり性なので，前日から緊張していた。”，“最初は，何をしていいかわからなかった。”，“自分の意見に根拠をつけて，他の人に話すということがおもしろいと思った。”，“想像以上に頭を使って，終わった途端少し疲労を感じた。”などであった。

【4. 自己評価】を形成した記述は，109 記録単位（16.0%）であり，さらに 5 サブカテゴリーに分類された。サブカテゴリーは「自己の展望」43 記録単位，「自己の悪い点」41 記録単位，「自己の傾向」15 記録単位，「自己の良い点」6 記録単位，「自己の日常の反省」4 記録単位であった。具体的内容は，“ディベートの機会があったらもう一度体験したい。”，“自分の言っていることは，後から考えてみると筋が通っていなかった。”，“自分の伝えたいことを相手にわかりやすく伝える事が自分は苦手だと思った。”，“冷静になろうと考えながらできたと思う。”，“普段，物事を論理的に考えて述べていくという事がまったくない。”などであった。

【5. ディベート演習に対する意見・感想】を形成した記述は，95 記録単位（14.0%）であり，さらに 5 サブカテゴリーに分類された。サブカテゴリーは「良い評価」29 記録単位，「気づいた点」25 記録単位，「意見・要望」19 記録単位，「批判」6 記録単位，「その他」16 記録単位であった。具体的には，“クラス全体で同じテーマを考え，それをディベートとして話し合うことは，短大に入ってから初めてだったし，よい機会であった。”，“どれも尊重されるべき意見なのだということに気づけた。”，“1 年生のときからあれば，大勢の人の前で自分の意見を発言することに慣れることが出来ると思う。”，“多い人数で，少ない時間内で全員が言いたい事を話し切ることは不可能だと思った。”などであった。

【6. 臓器移植について】を形成した記述は，41 記録単位（6.0%）であった。具体的内容は，“臓器提供をするしないに関してはドナーの意思が大きく反映される。”，“現在の臓器移植にあるいくつかの問題のうち，脳死についての考え方と，ドナーの家族が抱える精神的負担についてはさまざまな意見がある。”などであった。

【7. これまでのディベート体験について】を形成した記述は，41 記録単位（6.0%）であり，さらに 2 サブカテゴリーに分類された。「初めてディベートを体験した」31 記録単位，「過去のディベート体験」10 記録単位であった。具体的内容は，“今回のディベートは初めてであった。”，“小学生の時に一度ディベートをしたことがあった。”などであった。

【8. 看護との関連について】を形成した記述は，22 記録単位（3.2%）であった。具体的内容は，“ディベートに必要な技術・能力は，看護でも求められている能力であると考える。”，“物事を論理的に述べるというのは，看護師が患者さんと信頼関係を築くためにも重要になってくるものだと思う。”などであった。

【9. 他者評価】を形成した記述は，12 記録単位（1.8%）であった。具体的内容は，“自分の意見とは違うのに，人を納得させる意見を言えている人はすごいなと思った。”，“詳しく調べていて，それに基づいた意見を論理的に述べていた。”などであった。

【10. 実習時の学生カンファレンスとの関連について】を形成した記述は，11 記録単位（1.6%）であった。具体的内容は，“他のメンバーの発言を理解し，自分の意見との相違点について分析し，それを相手にわかりやすく発言する学生カンファレンスと，今回のディベートと非常に似ているといえる。”，“人の意見をしっかり聞くこと，そして理解し自分の意見を言うことは，学生カンファレンスなどにも応用できる力であると思った。”などであった。

【11. 生命に対する考えについて】を形成した記述は，8 記録単位（1.2%）であった。具体的内容は，“生命を大切に思っているということを感じた。”，“生命に対する重みをおいた考え方を感じた。”などであった。

Ⅳ. 考察

学生は，ディベート演習において多様な意見の存在に気づき，それらを理解することの大切さを学んでいた。また，そこから自分の考えを再確認するという作業を体験していた。茂木[12]は，『ディベートは，討論というそのイメージから，もっぱら話術としてとらえがちである。しかし，教育ディベートにおいて大切なことは相手を論破することではなく，議論を通して最終的には様々な意見の良いところを認めていくという態度を養うことにある。』と述べている。学生は，このディベート演習を通して，多様な価値観や考え方を実感し，それらの良いところを認めていく態度を自身の力で育んでいたと考えることができる。学生の「ディベート演習における学びや気づき」では，多様な考え方を理解するとともに，自分の意見や意識の変化，または自分の意見は変わらないことを自覚している。さらに，新しい意見や考え方の発見へと，多様な考え方を理解するとことろから，次のステップへと思考を進めていることがわかった。

一方，学生はディベートに必要とされることとして，「伝達力」，「構成力」，「知識」，「理解力」，「集中力」，「分析力」について記述している。ディベート演習をする中で，自分の発言や他者の発言から，それらの必要性を実感したと考えられる。「自己評価」のカテゴリー中の，「自分の傾向」というサブカテゴリーでも，「表現力」，「構成力」，「伝達力」について課題があるという記述があり，学生は，一般論ではなく自身の問題として捉えている。さらに自己の展望として，“きちんと想いを発表できるようになりたい。”，“しっかりと自分の意思を伝えられるように，学校生活の間から意識して生活していきたい。”とその後の方向性についても考えることができている。全体として，「表現力」，「伝達力」を課題と感じている学生が多かった。この演習で自覚できたことをきっかけに，課題克服へとつなげていく必要がある。

ディベート演習に対する評価としては，“クラス全体で同じテーマを考え，それをディベートとして話し合うことは，短大に入ってから初めてだったし，よい機会であった。”，“自分の意見とは異なる意見の立場に立って考えることは，普段しようと思ってなかなかできることではないので良い事で，有効だと思った。”など，肯定的な感想が多かった。また，“別なテーマで，ディベートをもっとやりたい。”という前向きな意見も多かった。ディベート演習は，受動的な授業とは異なり，学生参加型授業である。学生の能動的学習態度を育むことができるような取り組みが今後は必要である。

ディベート演習のための臓器移植の事前学習について，“臓器移植について漠然としか理解していなかったので，勉強できてよかった。”という意見もあった。ディベート演習のため，理解していないと意見を言うことができないというところからの動機づけであるが，自身で調べることにより「わかる」ことの喜びへとつながったと考える。

学生は，看護との関わりや実習時の学生カンファレンスとの類似点等についても考えていた。看護者として，対象者と向き合った場合，多様な価値観や考え方を理解する姿勢は重要である。また，その中で自身の考えを対象者が理解できるよう伝える力も重要である。ディベートを通して，ヒューマン・コミュニケーション・スキルを学生は学んでいたと考えることができる。保健医療福祉の現場では，相手の意見を理解すること，自分の考えを論理的に述べることは必要である。最近の学生はコミュニケーション能力が低下しているのではないか[13]と言われるが，最近の学生の周囲にコミュニケーション能力を育む環境が減少していると考える。少子高齢化，核家族化，偏差値教育，マニュアル化，など社会環境が，学生を取り巻く環境に大きく影響していると考えられる。人と関わる専門職を育てる教育の現場として，コミュニケーション能力を育む環境を，意図的に提供していくことが今後の課題である。

今回のディベート演習では，初めてディベートを体験した学生が多く，緊張や不安も多く述べられていた。学生が前向きにディベートに参加できるよう，事前の導入はより丁寧に行う必要がある。また，チームの立場が「臓器移植を受けたいが，臓器提供はしたくない」のように，複数の内容が含まれていたため，ディベートの焦点が定まらない傾向にあった。円滑にディベートができるよう，明確な設定を提示するよう改善が必要である。さらに，ディベート終了後の学びについて，学生とともに丁寧に共有することも重要である。

V．結論

1. 学生は，ディベート演習において「多様な考え方の理解」，「自分の意見の変化」，「新しい意見の発見」について学び，ディベートに必要な能力について気づくことができた。
2. 学生は，ディベート演習を通して，自己を振り返り，自身の傾向に気づき，今後の課題へとつなげていた。
3. 学生は，ディベート演習に対して肯定的な感想を持っていた。
4. ディベート演習の今後の課題は，導入を丁寧に行うこと，円滑にディベートができるよう明確な設定を提示すること，丁寧なまとめをすることである。

研究の限界と課題

本研究は，学生のレポートからデータ収集を行ったが，学びの本質をとらえられているかには限界がある。学生の学びの本質を捉えられるよう，データ収集方法の改善が必要である。

引用文献

1）茂木秀昭：ザ・ディベート―自己責任時代の思考・表現技術，ちくま書房，(2001)

2）川島みどり：「脳死」をめぐる公開ディベートを実施して，看護教育，33 (8)，571-573，(1992)

3）水河三保子，渡辺桂子，前田志名子他：あなたは脳死に賛成ですか。それとも…？，看護教育，33 (8)，574-583，(1992)

4）渡邊智恵，黒瀬真理子，高下裕美子他：生命倫理をテーマとしたディベートを実施して，看護教育，33 (8)，585-589，(1992)

5）櫻井文子，神崎江利子，松本友子：母性看護学におけるディベートを活用した倫理的価値観育成の為の教育効果について，聖隷学園浜松衛生短期大学紀要，第23号，68-75，(2000)

6）渡邊智恵，黒瀬真理子，高下裕美子他：論理的表現力を養うためにディベートを導入して，看護展望，17（1），88-93，（1991）
7）大石浩子：医学概論にディベートを用いて―生命倫理への関心を深めるために―，看護教育，33（8），590-594，（1992）
8）近藤裕子，近藤美月，岩本真紀他：ディベート授業における学生の学び―討論者・判定者・傍聴者の立場から―，香川医科大学看護学雑誌，6（1），7-11，（2002）
9）白石裕子，則包和也：精神臨床看護学におけるディベートを用いた学習効果の評価―学生レポートの分析から―，香川県立医療短期大学紀要，第5巻，99-104（2003）
10）煙山晶子，小笠原サキ子：老年看護学における教育方法の検討―ディベートの教育効果について―，秋田大学医学部保健学科紀要，13（2），150-157，（2005）
11）Bernard Berelson：CONTENT ANALYSIS，稲葉三千男，金圭煥訳『内容分析』，社會心理學講座7．大衆とマスコミュニケーション（3），みすず書房（1957）
12）前掲書1）
13）安藤香織，田所真生子編：実践！アカデミック・ディベート―批判的思考力を鍛える―，ナカニシヤ出版，（2002）